



## 留学生としての人生と日本の大学の 教員への旅 —その中で感じた日本

スレッシュ アワレ  
Suresh AWALE 富山大学和漢医薬学総合研究所天然薬物開発分野准教授

私は高校時代から化学が好きで、母国ネパールの大学・大学院で無機・有機化学全般にわたって勉強し、院生卒業時の化学国家試験の首席合格を果たし、当時の母国国王より金メダルを授与されるほど化学について情熱があった。薬用植物からの創薬の夢があったため、1998年11月、日本唯一の和漢薬研究所(富山医科薬科大学)に留学のため来日した。

来日当初は興奮と不安があった。夢を追いかけることにわくわくする一方、日本人の生活・仕事習慣に合わせることは困難だった。既定され、しかも暗黙の社会ルールが多く、そのルールを理解して慣れるまで時間がかかった。英語を話せる人が少なく、取扱説明書や操作手順なども日本語のみで書かれていたため、言葉の理解には大変苦労した。また、生魚も無理で、研究所仲間達と寿司パーティーの時には鶏卵しか食べなかった。また当時はインターネットが普及しておらず、ネパールへの国際電話は1,000円で5分間しか通話できなかった。ホームシックだった私は家族にしばしば電話するので、銀行口座残高がすぐギリギリになることにも悩んだ。

2003年に博士学位取得後、文部科学省ポスドク研究員を経て同研究所の助教に就任した。2010年に同大学は新たな国際研究拠点の核となる若手研究リーダーを育成するため「先端ライフサイエンス拠点」を設置し、テニュアトラック特命教員の国際公募を行った。私はそれに応募し、2011年に拠点の特命助教に着任した。2014年に国内外専門家から成る評価委員会による業績審査に合格し、2015年に今の職に就いた。テニュアトラックプログラムの資金支援により設立した「天然薬物開発分野」の独立PIとして研究を主宰し、ユニークな栄養飢餓戦略を用いて薬用植物から天然抗がん剤、特に抗腺臓がん剤の開発を究極の目標とし、次世代ハイレベルの研究に地道な努力を日々続けている。

その旅の中で、妻と出会い結婚して娘に生まれ、育児、保育園、学校、地域などの行事への参加を体

験し、学术界以外の様々な場面を通して日本の伝統・文化・特徴を更に実感・理解できた。

その中で一番心を打たれたのは、日本人が何事に対しても丁寧に行くこと。特にサービス業ではお客様に対する対応はいつも丁寧で温かく、「世界一のサービス業」と世界で高く評価されていることである。私の妻も仕事をしているため、娘は誕生6か月から保育園に預けた。最初は不安がたくさんあったが、毎日の通園連絡帳には、娘のお昼寝時間、おむつ交換回数、おやつ種類・回数、給食食材などについて、保育園の先生達がとても丁寧に書いてくれ、その丁寧さを見て安心した。おかげで、子育てしながらの共働きを円滑に進めることができた。本当に感謝している。日本には、世界で最も良い乳幼児保育システムがあると思う。また、日本は高度な現代化を遂げたが、昔の伝統もしっかり守り続けている。春に「春祭り」、夏に「みこし祭り」、秋に「文化祭」、冬に「餅つき会」など、子供から高齢者までたくさんの住民たちを楽しませながら伝統が世代の間に伝承される。素晴らしいと思う。

一方、日本人は曖昧な言い回しをすることが多く、会話の理解は難しい場合がある。日本人は賛成・反対を明確に言わない傾向があり、主語省略の表現も多い。「一を聞いて十を知る」「以心伝心」を重んじている。異文化を持つ外国人にとって、曖昧な表現から微かなニュアンスを理解するのは困難である。現在、グローバル化が進む各業界では、外国人とのやりとりや交流が増える中で、効率向上や誤解を避けるため、曖昧な表現は避けた方が良いと思う。

時間は全てを変える。今の私は刺身・寿司のファンになり、納豆や日本酒も大好きで、来日当初躊躇して入れなかった温泉も完全に楽しんでる。日本の文化は、私の生活の不可欠な一部になっている。

キーワード

留学生、薬用植物、創薬、日本の保育園、日本の伝統的習慣

Copyright © 2018 The Pharmaceutical Society of Japan